

黄霊芝文学・その基底としての悲喜劇

— 小説「豚」の表象世界 —

下 岡 友 加

はじめに

黄霊芝（一九二八—）は台南市に生まれた台湾人作家である。日
本統治下の台湾で十七歳まで日本語教育を受けた彼は、これまでに
俳句、短歌、小説、随筆、評論、童話など幅広いジャンルに渡る日
本語作品を生み出してきた。創立当初（一九七〇）から今日に至る
まで台北俳句会主宰をつとめ、その成果として編著『台北俳句集』
全三十六集（自費出版、一九七一〜二〇〇九）がある。

二〇〇四年には『台湾俳句歳時記』（言叢社、二〇〇三・四）に
より、第三回正岡子規国際俳句賞を受賞し、二〇〇六年秋には「日
本文化紹介に寄与した」として旭日小綬章を授与された。日本語の
みならず、中国語、フランス語での創作も行い、一九七〇年、日本
語を中国語に書き直した小説「蟹」で第一回呉濁流文学賞を受賞し
たほか、二〇〇六年には台湾文学家牛津獎を受賞している。

このように近年、特に高い評価を受ける黄であるが、従来はとも
すれば彼の創作行為の特異性、すなわち戦後台湾で禁止された日本
語を使用し、長く発表のあてのないまま創作を行ってきたことのみ
が取り沙汰され、また彼の作品の多くを収める『黄霊芝作品集』全
二十一卷（自費出版、一九七一〜二〇〇八）が非売品ということも
あり、その文学の総体や特質については、十分な考察が行われてこ
なかつた。^①

既に別のところでも述べたように、「日本語」は日本人のみが使
うのでも、使われたのではない^②（黒川創）。にもかかわらず、日
本文学は、「日本」―「日本人」―「日本語」―「日本文学」を一体
のものとする^③（小森陽一）四位一体の思考のなかに長く閉じてき
たと言える^④。黄霊芝の文学は、日本語を使用する民族や場所を限定
しない、日本語文学の存在やその可能性について新たな視座を我々
に与えるものであろう。

さて、稿者は黄靈芝がこれまでに発表した三十一編の日本語小説の特徴として「登場人物たちの幸せな生活の成就や調和的世界の実現が悉く欠如」^⑤している指摘したことがある。この特徴は、黄の創作期間がほぼそのまま戦後台湾の厳しい社会状況（一九四九年～一九八七年まで戒厳令施行）のなかにあったことと、おそらく無縁ではあり得ない。しかし、彼の文学は単なる悲劇として造型されず、その多くが登場人物の妄想や滑稽化な言動を描いて悲喜劇としての様相を呈しており、読む者をひきつける大きな魅力となっている。そうした観点に立つならば、ここでとりあげる「豚」（初出『岡山日報』^⑥一九七二・二・二六～三・一〇。のち『黄靈芝作品集 巻五』一九七三・九 所収）は、黄の小説のなかでも、卓越した悲喜劇の一つと位置づけられよう。^⑦

本稿は黄靈芝文学の内実に迫るべく、小説「豚」に描かれた悲喜劇の具体とそれを支える方法を明らかにしようとするものである。なお、小説本文の引用は最も新しい稿である『黄靈芝小説選集』（自費出版、一九八六・一〇）に拠り、漢字は新字体に改めた。全十五章で構成される小説内容の概略については末尾に表を掲げた。

一 天邪鬼「私」の挫折

小説「豚」は、「私」（小説末尾・第十五章に「三十五歳」と明記されている）^⑧の農業開始と、それが惨めな失敗に終わるまでの経緯

を語る物語である。但し、失敗という結果は第十章までは明確にされず、時間の流れにはほぼ忠実に沿って出来事を語る物語言説により、読者は「私」の挫折劇を同時進行的に味わうことになる。^⑨

父の遺した田畑を小作に出して生活していた工芸家の「私」は、戦後政府が実施した土地改革により、地主としての地位を失った。^⑩小作料の代わりに生活費を稼ぐ必要に迫られた「私」だが、「美術工芸学校の講師の口」や「著名な故宮製陶」会社等の勧誘をすべて断る。その理由は「束縛された生活が嫌い」で、「上役に頭を下げるなど真っ平」だし、何より「細君めが真っ先に賛成して、私に就職するよう勧めるものだから、ますます嫌になるのは天下の男子の一人として当然のこと」（一）（括弧内の数字は引用の章番号をあらわす。以下同様）だと語られる。

急に生活できなくなった「私」は「もう細君を捨てるより仕方なかった」と、実際に「もう一度嫁に行ったらどうかと勧め」てみたが、拒否された。「お金がなかったら今の世の中では生活出来ない」と訴える妻に対し、「私」は大昔、医者のない時代から人は生きて来たことや、ストレプト・マイシンがなくても子規や蘆花、シヨパンは立派な仕事を残したことなどを根拠にあげ、「金なんかなくたって俺は平ちゃらだ」と豪語する。そもそも「私」が芸術家を志したのも、次のような理由からであった。

適当に怠け者で我が儘で、そしてそれにもまして天邪鬼に出来ている私は、とに角他人の好むものは何でも嫌いだ。来た。立身出世を念願して齷齪している人を見ると他人事ながら腹が立ってならない。へどを吐いて見せてやりたくなる程である。例えばセパードという犬がいた。頭が好いとかで大変な流行である。この一事だけで私はもうセパードを親の仇か何ぞのように憎み嫌うのである。芸術などで飯は食えないという言葉が通用していた。それだからこそ、よし、それなら芸術家になってやろうと考える私であった。飢え死になど少しも怕くない。

(一) (傍線引用者、以下同様)

「天邪鬼」との自称通り、「私」は徹底して世間一般の価値観の真逆を生きようとする人物である。が、現実には主食の米を自分で植えることはできず、一人娘の通う幼稚園の月謝の支払いを考えるに、全く金の要らない生活など不可能であった。「私」は「最初に銭というものを発明した野郎」は「人類最大の悪人」だと悪態をつきながら、生活のため現在の家を売って陽明山に移転し、果樹を植える「百姓」になろうと決意する。

「私」はいう。果物は主食ではないため「何だか高級」であり、「果樹園を経営しています」という言葉も「何となく語呂も悪くない」。また、一度植えれば、その後も何十年か収穫できる果樹は「怠

け者の私にはお誂え向き」だ。そして、「一斤一元や三元のために私のような大工芸家が汗水を流すなんて愚の骨頂」とも考える「私」は、誰も植えようとはしない(土地に適しない)高級な果物を育てようと目論む。しかしながら、その結果は第十三章に至って詳述されるように「一番独創性のない、いわば芸術家の私にとって一番面白くない奴しか育た」(十三) ないという見込みはずれの現実であった。

また、果樹の肥料に糞を利用しようと飼いはじめた豚も、自身の労働限界のため、手放さざるを得なくなる。最終章(第十五章)で豚を業者に売った後、「私」は次のような自己嫌悪と自己否定の念にとらわれる。

(…) 私めは彼(Ⅱ豚) (引用者注) を救うために山を駆け下り、豚屋の手から彼を奪い返すことをしようとはしなかったのである。ああ、私めは人間ではなかったのだ。(十五)

右のように、小説「豚」は傲慢で天邪鬼な芸術家「私」が農業を通じて挫折と妥協を知り、自らの卑小さ、非力のほどを痛感する物語である。作品の背景には戦後の台湾で生活の変容を余儀なくされた地主層の悲哀が存するが、作品はその背景には深入りせず、あくまで「私」一家の生活を描くことに終始する。「私のような大工芸

家」(一)という自負から「私めは人間ではなかった」(十五)という自覚まで、「私」の自己認識は大きく揺らいで、失墜する。読者はこの逆転の劇、誠に皮肉な「私」の自己発見の物語を楽しむのである。

二 喜劇の装置——妻と娘という他者

一人称小説でありながら、この小説が喜劇の要素を持ちうるのは、妻と娘が「私」の鏡として十全に機能しているからである。小説「豚」は、「私」目線から農業への期待から失望に至るまでの落差を読者に感得させる一方、「私」の視点の独占(優位性)を妻(＝現実主義)と娘(＝理想主義)によって常に揺るがす。たとえば第二章は、豚を飼うという「私」の計画に反対する、次のような妻の声からはじまる。

—— あんた、豚を飼うんだって？

—— うん。

—— 止してよ。あんな穢ないもの……

—— 綺麗にしてやればいいよ。お風呂にでも入れて……

—— 気持ち悪いわよ。プウプウ鳴いて。そんなのが家にいたらわたし卒倒するわよ。

—— 慣れれば怖くなくなるよ。亭主と同じだ。

—— 何を食べさせるつもりなの？ 豚はたくさん食べるのよ。

—— ああ沢山食べて沢山出すんだ。そこが魅力なんだ。

—— 誰が掃除するの？ それに豚は腐ったものを食べるものよ。家中が臭くて呼吸も出来ないわ。

—— 心配しないでもいい、腐つてないものをやればいいさ。

—— 何のために飼うのよ。豚を飼ったって儲からないって隣長さんがいつてたわ。忙しくなるばかりだわ。(二)

妻の抗議にまともにとりあわない「私」だが、右で妻が述べる傍線部の指摘はすべて正しく、のちに「私」の農業生活に大きな誤算を生じさせる原因となる。

「私」は農業について全く知識のない妻を、「よほど馬鹿な女だ」「哀れな女だ」(一)と軽んじているが、豚を飼うことにより、妻と「私」の立場は次第に逆転していく。最初に飼い始めた豚は「私」が用意した餌を食べず、小屋を破って何度も遁走する。これは先に妻が述べた通り、豚が腐ったものしか食べないからなのであるが、それに気がつかない「私」は「蜘蛛の巣だらけにな」って小屋の柵を補修し続ける。妻は「何を好き好んでこんなことをするのだから。よっぽど馬鹿な女だよ」(五)と夫の行動を「嘲笑」する。

さらに、妻の反対を無視して豚を一匹から三匹へと増やした結果、「私」は喧嘩ばかりする豚の仲裁と小屋の掃除と餌の用意に毎

日明け暮れ、「食事一つ寛いでとつたこともほとんどない」(十)状況へと追い込まれる。豚につきっきりの「私」を見て、妻は「そら始まった、豚屋の親爺が喚いていと嘲笑し、本当の大馬鹿だと軽蔑する」(九)。

彼女にいわせると私の体には豚の体臭が染み込んださうである。今にダニも湧くという。幸いなことに私たちは結婚以来室を共有しない習慣だったから、どうにか夫婦円満を保ってはいるが、この頃細君めは私の肌着を洗ってくれなくなった。(九)

そして、遂に第十一章の冒頭では「ねえ、豚を売ってしまいなさいよ」という細君の言葉に「私」は「そうだね」と同意することとなる。ここまですごく妻の提案や意見を無視してきた「私」が、はじめて忠告に素直に応じた場面である。「私」は豚の餌を採取している際に崖から転落し、怪我を負ったのである。

このように、「私」の豚の飼育をめぐる悪戦苦闘は、妻の存在によって「嘲笑」の対象となり、「私」の独りよがりな思いこみや行動はそれと暴かれ、滑稽化する。¹¹⁾

一方、娘は豚嫌いの母親とは異なり、豚と真つ先に友人となつて豚を可愛がる人物である。そのことを豚の方も了解している。特に娘のお気に入りである「ブウスケ」(豚の名)は「私」よりも娘にな

ついでいて、彼女が学校から帰ると足音でそれをすぐに察知し、「ヒイヒイ鳴いて娘を探す」。そして娘が豚小屋の柵の前に立つと「体をすり寄せ、不恰好な唇を巻き上げて甘え」、「娘が櫛で背中を引っ掻いてでもやると、彼は桃源郷に遊んでいるような目つきをし、柵に靠れかかったまま、軒をかき始める始末」(十二)であった。

豚が来てからずっと「弁当をちよっぴりしか食べ」ず、「大部分を豚めのために残して帰る」(十一)ような、やや常軌を逸した愛情を娘は豚に見せているのだが、それ故にブウスケを売るといふ父親の決断に対し、彼女は強く抵抗する。「何故ブウスケを売らねばならないの？ 売ればブウスケは殺される。それを知っていて売りに出すの？」と「一度として私に楯つくことのなかった娘」が初めて「私に反対し、だだを捏ね」(十五)る。

あんなに可愛がつて育てて来たブウスケを売る、それは人非人に近い行為なのだ。どうしてそんなことが出来るの？ もし家にお金がないんだったら、自分は学校を止めてもよい。もっと悪いものを食べてもよい。新しい洋服なんか欲しくない。もしパパが草刈りが嫌いなら自分が刈ってもよいというのだ。(十五)

「私」自身、ブウスケを売る行為にうしろめたさを感じているだ

けに、娘の純粹な言葉は手痛い批判である。小学校三年生の娘はブウスケが売られる日、彼に別れを告げるために学校を早退し、自分の弁当をそっくりそのままブウスケに与え、首には自分の御守りをかけてやる。豚と娘の交流は、もはや人間／豚という種を越境している。

このように、人間と豚を同位に置く娘の存在は、手前勝手な理由で動物を飼い、「家族の一員」（十四、十五）と言いながら、実際には自分の都合で売買する「私」の行為、そのエゴイズムと奢りを否が応にも明るみに出す。妻と娘は「私」語りの優位性を剥奪し、「私」の言動を相対化し、「私」の愚かさを浮かび上がらせる装置して効果的に機能しているのである。

三 知識人／芸術家批判

「私」の農業生活の顛末は惨めな結果へと行き着き、「私」の自尊心や奢りを突き崩したが、何故「私」の農業は失敗に終わったのだろうか。その最大の原因として考えられるのは、進取の気象に富む（裏返せばやや非常識な）「私」の言動である。「私」は海外から植物を移入・移植し、新しい栽培や飼育方法を取り込もうと書物を尊ぶ一方、土地の伝統や先祖代々からの百姓の忠告を軽視する。

たとえば、当地で昔から百姓を行っている隣長さんが、豚は「大きくなったら一匹で百斤の餌を食えますよ」とあらかじめ注意して

くれているにもかかわらず、「私」は、本から仕入れてきた知識を根拠に、「隣長さん達という「豚はよく食べる」などの言葉はそれ自体がすでに時代後れ」（二三）と断定する。

「書物で、読んだところでは、若豚一頭の一日の食餌は石油缶一個に過ぎない」「書物によると百キロの体重を増やすためには三十八キロの蛋白質があれば好い」（二三）（傍点引用者）と、「私」は隣長さんたちの経験より、あくまで書物の記述、数値の方を信奉する。

この「私」の判断の前提には「私は生まれつきの百姓ではないから頭は悪くない」（一）「彼等と違って頭の好い私」（三）という地主層出身の「私」の差別意識が見てとれるのだが、第十章以降に明らかになるのは、「私」の「よほどの計算違い」（十一）の方である。台湾ではクロレラ採取に必要な明礬の価格が高いため、「ほとんど唯でクロレラが手に入ると考えたのは大きな間違い」であった。また「本によると、クロレラは分離されて沈澱するとあった」が、「私の経験では逆にクロレラが浮上した」（十）と、本の記述と現実との不一致も生じる。そして、伝統的な豚の飼い方の「テクニクを無視した」（十一）ために、「私」の豚は生後六ヶ月経っても大きくならなかった。

豚の飼育のみならず、果樹栽培についても同様の結果が明らかにされていく。農業をはじめた時、「私」は「植物にしる動物にしる生物には環境に順応する能力が」あり、「北海道の少女が台湾へ嫁

に來たからといって日射病に罹るとは限らない」(一) という自説を誇っていたが、最後に得られたのは、「植物にとって適地生存ということとは動物以上に大事な条件らしかった」(十三) という認識である。大自然の摂理、生物それぞれ固有の生態、特性を容易に変えることはできない。

こうして、「私」の机上の計算と現実とのギャップが露呈した後、パリで行われる「国際青年学術展」参加への意志が豚のブウスケを売る理由として掲げられる。

大工芸家の夢から長く離れていた私は、この芸術の都で開かれる国際展への参加ということで夢を醒まされた形だった。この展覧会は仏国政府の主催により隔年に開かれる。参加資格は青年であること、そして各国政府の推薦によることとされていた。

面白いことに、フランスでは三十五歳までを青年と呼ぶのだそうであった。三十五歳を越すと参加資格がなくなる。そして私は今年が丁度三十五歳だった。私は一挙に燃え上がった大工芸家の夢を前にして、我がブウスケを売ることには断を下した次第なのだ。(十五)

自己の欲望に忠実に世界を再構築しようとする芸術家「私」の欲求・野心は、一度は農業に向けられたが、それは「私」が思うよう

には通用しない。不可能を知った「私」は自身の力一つで変形・頓略可能な芸術の世界に還るほかない。パリの学術展はそのための契機(言い訳)に過ぎないことははや明白であろう。失敗に終わった農業の代替を求め、「私」は再び自らがコントロール可能な世界へと還っていく。人間の知識の集合体(書物)をも裏切る現実は、「博学な私」(二)「頭の好い私」(三)という自称知識人の「私」に、自然という大きな他者の存在を知らしめ、自らの限界を教えた。「私」の農業失敗の顛末には、台湾独自の天候や肥料価格という事情もさることながら、知識人／芸術家への痛烈な批判が込められている。そして、エリートとしての「私」の無力は、次に述べるような人間存在への本質的な懐疑へとつながっていく。

おわりに

小説「豚」は、「私」をはじめとする登場人物たちに一切名前を与えていない。ここから「私」を作者である黄霊芝に重ね合わせ、「豚」をいわゆる私小説として読むことも、無論可能である。黄霊芝が実際、陽明山に住んでいることを知っている者なら、なおさらであり、またそのような情報がなくとも、果樹栽培の方法や豚の飼育に関する事細かな記述には、作者自身の経験が生かされているに違いないことは、読む者に明らかである。

しかし、この小説の人間の無名性は作者の自己戯画化に止まら

ず、「私」とは読者の「私」でもありはしないかという問いかけをも可能にする仕掛けである。知識人の「私」が、農業を通じて己の卑小さ、非力、限界を知り、「私めは人間ではなかった」との惨めな自己認識に至る経緯とは、「私」を笑う読者のそれではなかったか。金銭中心の社会に毒づく「私」が、愛情をかけた豚を金銭に交換するという矛盾は、現代を生きる我々の日常ではないか。豚一匹すら飼い続けることのできない「私」の無力は、近代科学（知）に依存して生きながら、自然の力を完全には克服できぬ我々人間一般のそれではないか。

ちなみに、「私」の飼った豚三匹は「ブウスケ」「ズングリさん」「ハナマガリ」（のちに「ロクデナシ」と改名）と名前がある。「私」が畑に植えた蜜柑は「桶柑」「オレンジ」「温州蜜柑」、栗は「有磨」「利平」「銀寄」とその品種名がすべて明らかにされている。豚をはじめとする各動植物の生息、特徴の記述は極めて詳細であり、栗についてはその取り寄せ先までが固有名とともに記されている。自然物の個別性、それに関わるリアリティーの方が人間の名よりも優先されたこのような小説の力学は、小説を構成する十五章すべてが、ことごとく豚に関する情報、記述から始められているという方法にも通じていよう。そうした小説の技法は、「私」が農業に失敗したこと、或いは自然の美に魅了され、自生の植物に養われたという物語内容とあわせて、決して人間の思い通りにはコントロールできない

い動植物、自然の大きさを存在感を伴って描出する。

「豚」は戦後台湾の一家族の営みを悲喜劇として活写しながら、人間と社会、人間と自然の関係性を的確に捉えて今日にも通じる普遍的な世界を表象し得た小説であり、黄霊芝の日本語文学を代表する「傑作」(西田勝¹⁵)である。

表 小説「豚」の構成

豚の数	章	主な物語内容	妻の様子
0	一	「私」一家、陽明山に引越す 引越先決定までの経緯	妻の言葉から 章始まる
0	二	農業開始 金がなくても生活できることを実証	妻の言葉から 章始まる
0	三	豚を飼う意義や方法に関する「私」の見解	妻、嘆息
1	四	豚（ブウスケ）を飼い始める	妻、嘲笑
1	五	ブウスケは一日何も食わず、小屋から遁走	夫を嘲笑
1	六	ブウスケは腐ったものを食べるのが判明	
1	七	ブウスケ、もはや家族 クロレラ養豚の目論見	
3	八	新たに二匹の豚を飼う	妻の言葉から 章始まる
3	九	三匹の豚が引き起こす騒動（ケンカ）	妻の言葉から 章始まる
3	十	三匹の豚が引き起こす騒動（イタズラ） 「私」の計算違い露呈し始める	夫を軽蔑
3	十一	豚（後から飼った二匹）を売ることを決意	
1	十二	二匹の豚を売る	妻の言葉から 章始まる

1	十三	植物の生育に「私」は失望
1	十四	ブウスケ農薬中毒、一命をとりとめる
(0) 1	十五	ブウスケを売る しよんぼり

注

- (1) 黄霊芝の生涯、並びに創作全般に目配りした唯一の先行研究として、岡崎郁子『黄霊芝物語―ある日文台湾作家の軌跡』(研文出版 二〇〇四・二)がある。現在、日本では国江春菁著・岡崎郁子編『宋王之印』(慶友社 二〇〇二・二)によって黄霊芝の日本語小説三十一編のうち、十五編を読むことができる。但し、『宋王之印』の出版はあらかじめ黄霊芝本人の承諾を得たものではない。この出版経緯については、岡崎郁子『宋王之印』出版顛末記(『燕巢』二〇〇七・八)に詳しい。
- (2) 『国境』(メタログ、一九九八・二)。黄霊芝の日本語文学が日本の植民地支配の(負の遺産)に他ならないという問題と、あくまで創作言語を選択する(主体)であろうとする黄霊芝の主張・立場については、拙稿『戦後台湾の日本語文学―黄霊芝「董さん」の方法―』(『昭和文学研究』第58集 二〇〇九・三)において論じた。
- (3) 『ゆらぎ』の『日本文学』(日本放送出版協会、一九九八・九)
- (4) たとえば、在日朝鮮人作家である金石範は「日本文学は、これまで、単一民族の文学としての日本文学という枠組みをもって、それで、在日朝鮮人の文学を計ろうとしてきた。いわば、日本文学には他者が見えなかった。朝鮮の文学は他者でさえなかった。日本文学はそういう他者を見る目を持たなくてはいけないと思う」と述べている(『文学的想像力と普遍性』青山学院大学文学部『日本文学科編』『異郷の日本文学』社会評論社、二〇〇九・四)。

- (5) 拙稿『黄霊芝「蟹」論―人間の原始的な意義―とは何か?―』(『現代台湾研究』第37号 二〇一〇・三)。同様の特徴を持つ小説の分析として他に、拙稿『黄霊芝の日本語文学―小説「紫陽花」を中心に―』(『現代台湾研究』第35号 二〇〇九・三)がある。
- (6) 『岡山日報』は一九五二年五月創刊の地方経済紙。代表取締役・主筆であった原敏の急死(一九九九年三月八日)により、一九九九年三月二十九日廃刊。原敏に生前インタビューを行った岡崎郁子『黄霊芝物語―ある日文台湾作家の軌跡』(注1)に拠れば、黄の作品集を偶然読んだ原が、その文学を高く評価し、同紙への寄稿を黄に求めたという。
- (7) 山田敬三は『宋王之印』の書評で、「作家としての力量を見せてくれるのは、集中に収められた二つの中編―『紫陽花』と『豚』であろう」と述べ、「みごとな心理描写や文面にあふれるウィットとユーモア、ペーソスが読者を最後まで引きつけて離さない」と評価している(『無名の大家』(『図書新聞』二〇〇二・七)。また、西田勝も『宋王之印』に収められた作品のなかでは、「豚」がもっとも印象に残った」とし、「時流に反して、すべて手作りでコトを行なうことが、時として市場経済的にはどんなに見合わないものなのか、そのドン・キホーテぶりが見事に表現されているだけではなく、末尾を屠殺場に連れ去られて行く豚の悲鳴と、豚を愛した娘の父親への無言の叱責とを、愛の偽善でなければ裏切りへの断罪と受け止め、戦慄する男の心的葛藤の描写で結んで、悲劇にまで達した最上の喜劇となつていく。傑作といつていいだろう」と高く評価する(『書評 岡崎郁子著『黄霊芝物語』ある日文台湾作家の軌跡』今でも日本語で書き続ける台湾人作家『中国研究月報』第58巻第8号、二〇〇四・八)。
- (8) 小説はほぼ時間順序通りに構成されているが、小説冒頭から末尾までの時間経過を明確にはかる材料(記述)はなく、農業開始時の「私」の年齢は不詳である。但し、果樹園の栽培結果が明らかになっていることや

豚の成長ぶりから、最低でも一年以上の時間が小説内で経過していると考えられる。

(9) 但し、例外的に第二章の末尾「豚の糞が土質改良に最良であることは誰にも意義のないこととされていた。だが……」、第八章の末尾「それからなのだ。三匹の豚めのために私は実に大変な日々を追い込まれるのである」というかたちでの伏線、先の展開を予期させる記述は存する。

(10) 台湾の農地改革は「三七五減租」(一九四九年)、「公地放領」(一九五二年)、「耕者有其田」(一九五三年)の三段階を経て実施された(渡辺利夫・朝元照雄編著『台湾経済入門』勁草書房 二〇〇七・六 参照)。よって、小説は一九五〇年代中頃、六〇年代の台湾社会を背景にしていると考えられる。

(11) 但し、「当地の農家で誰一人植えていない小蕪やセロリを播いたりして、それを農家の人達に自慢」(二)するという妻の行為も小説には描かれており、台湾では誰も栽培していないことを理由に粟を植える「私」と、似た者夫婦である一面をも見せている。

また、『黄靈芝小説選集』所収にあたり、「豚」の小説末尾は「以来、娘は私めに——いや人間と云うものに——憎悪を感じている。」(初出)から、「以来、娘は私めに——いや大人という大人に——憎悪を感じている。／＼と同時に、妻が二、三日しよんぼりとしていたのも、これまた一体何故だったのだろう。」と改稿された。改稿により、娘の憎悪の対象が「人間」から「大人」へと限定され、かつ妻の豚に対する愛情の存在が暗に示された。結果として小説の持つ毒は薄められたが、妻の真意をうかがい知ることができるようになり、豚によってもたらされた家族三人全員の変化がより周到に小説に書き込まれた。

(12) 「恐らく豚めに一々名前をつけて飼ったのは私の家だけだったかも知れない。今考えてみても私の三匹の豚は、よその豚より幸福だったと思う」

(八)と語られているように、「私」も単なる家畜としての世話の域を超える愛情を豚に注いでおり、その点では娘と共通する性質、親子の類似も見られる。

(13) 黄靈芝自身、フランスで開催された第二回パリ国際青年芸術展に彫塑を出品し、入選を果たしている(一九六二年)。但し、それは彼の陽明山移転(一九六三年)以前のことであり、身勝手な登場人物「私」造型のため、作者の経験は十二分に加工され、利用されている。

(14) 本文では詳しく論じることができなかったが、自然は豊かさや美をもつて、「私」一家に恵みを与えている。たとえば「人は金がなくても生活出来る」という「私」の主張は、山の色々な食べ物(葱、百合、蕨、茗荷、桃、蕃石榴、柿など)によって、ある程度は可能なことが実証された。また、山には「見ていて動悸を覚えるほど美麗な」虫が多く存在し、それが「私」を魅了する。さらに「農業とおよそ縁のない生い立ち」(一)である妻も、自分の畑や花壇を作って「少しずつ山の生活になじんで来」(二)たり、娘も土地が急に広くなったので大喜びする。「怠け者を自認していた」「私」も、自身の畑の設営のために汗まみれとなり、「案外な働き者であることに自分でも意外な気がした」(一)という新たな自己発見も行われている。

(15) 注7に同じ

【付記】本稿は、広島近代文学研究会(平成二十二年五月八日 於比治山大学)、台湾史研究会七月例会(平成二十二年七月二十五日 於関西大学)での口頭発表に基づくものである。会場内外で貴重な御意見を賜った方々に感謝申し上げます。

——しもおかゆか、県立広島大学人間文化学部准教授——